

平成29年6月15日(木)

老球の細道335号

## 母は偉大なり

会津バスケットボール協会 室井 富仁

NBAプレイオフ決勝戦はケビン・デュラントが加入したゴールデンステイト・ウォリアーズが大方の予想通り連勝している。デュラントのここぞという時の1:1能力は誰も止められない。応援に来ているお母さんが頻りにテレビでクローズアップされる。

デュラントはワシントンD・Cで母ワンダと父ウエイン・ブラッドの第2子として生まれた。兄弟は兄、妹、弟の3人である。決して裕福とはいえない環境で育った。父はデュラントが1歳の誕生日を迎える前に家を出てしまい(13歳の頃に再び現れる)、ほぼ全面的に母のワンダが子どもたちを育て、町から町へと引っ越しが多かったという。

母についてデュラントは「母さんから教わったことはシンプルなこと。ハードワーク(努力)に限るね。食事もありとらずに仕事をして、僕たちを育ててくれたんだ。僕は母さんが2、3時間しか睡眠を取らずに、日が昇る前の暗い時間帯から出かけて仕事をしていたことを忘れることはない」とある雑誌のインタビューで答えている。

また、2014年にレギュラーシーズンMVPを受賞した時は、授賞式で世界中に感動を与えるスピーチをした。母ワンダに対して「母さんは自分を犠牲にして育ててくれました。母さん、あなたこそ真のMVPです」と語った。(月刊バスケットボールより)

ミニバスなどのクリニックに出かけると、お母さんたちの存在が大きいことが実感される。練習会場への送迎のみならず、コートに運動着姿で立ち、私と一緒に子どもたちを指導してくれるお母さんたちもいる。また、コーチ育成のための「コーチングスクール」に3年間皆勤で参加して、指導法勉強をしたお母さんもいる。子どものバスケットボールのために自分の時間を費やしてくれる母親の姿を見れば、子どもは頑張らずにはいられない。

私の亡くなった母はバスケットボールにはほとんど関心がなかった。もっぱら父の方が子育てに熱心で、私の中学、高校時の試合などはよく観戦に来ていた。母と私は当時喧嘩ばかりしている中で、家にいると母との口論が絶えなかったので日中はなるべく家にいないようにした。そのため体育館にいる時間が長くなり、バスケットボールに関わる時間も長くなった。おかげでシュートも面白いように入るようになった。今思うに、別な面から母も私のバスケットボール人生に影響を与えていた。人生何がどこでどのように影響するかわからないものである。言えることは、「無駄なことは何もない」。

母の影響力と言えば、会津の人はこの人を忘れてはいけない。野口英世である。英世を赤ちゃんの頃に火傷をさせてしまった母シカは、それはそれは献身的に英世の子育てに尽力したと伝えられる。父は飲んだくれて英世の成功物語には登場してこない。

「世界の野口英世」になり、南米エクアドルで黄熱病の研究に邁進している時、母シカは流行病で66歳の生涯を閉じた。病の床では何度も息子英世の名前を呼んでいたという。異国の地で母の死を知った野口英世は「身体は消えても、母は私の身体に残っているから、寂しくありません」と語ったことはあまりにも有名である。

「男は歴史を作る。母はその男を作る」。かつて「育児なし」と子どもたちや教え子たちから揶揄された私は、母と子の関係をとてもうらやましく思う。「父の日」を忘れないで覚えているのは、わが家では私だけである。